

アジアにおけるオランダの政治的態度 —18 世紀セイロンにおける外交を事例として—*

アリシア・シュリッカー

(翻訳 住政二郎)

はじめに

17 世紀から 18 世紀のアジアにおいて、外交はオランダの商業的駆け引きに必要不可欠な要素であった¹。17 世紀には、オランダ東インド会社 (VOC: *Verenigde Oost-Indische Compagnie*; *Dutch East India Company*) が設立され、アジアにおける交易網が広範囲に築かれた。多くの場合、オランダは、商館建設や交易許可を得るために、現地の統治者に従った。オランダは、こうした特権を、軍事力によって無理やり手に入れることもあったが、多くの場合、それは外交的手段によって行われた。アジアにおけるオランダ外交は、驚くべき成功をおさめた。その最も顕著な例は恐らく日本である。1639 年、時の将軍がポルトガルおよび外国との交易を閉ざした後も、オランダのみが交易を許可されていた。それ以来、オランダは、将軍への敬意を表すために、出島から江戸に使節団を毎年送っていた。1790 年以降、この表敬訪問は、4 年に 1 度に減少した。使節団の訪問は、幕府の儀礼、贈り物および情報の交換を中心に行われ、両国の関係維持に寄与した²。同様に、オランダは、シャムや、南インドのマドゥライやゴルコンダ、スリランカのキャンディ王国といったアジア諸国にも使節団を派遣していた。より偶発的ではあるが同様の性質を持つ使節団は、清皇帝、ペルシア皇帝およびムガル皇帝にも派遣されていた。

西欧外交が東アジアと接触する際における儀礼の役割は、かなり議論されてきた問題である。例えば、清朝における「叩頭」儀礼 (*kowtow ritual*) は、この数十年間を通じて注目を集めてきた。18 世紀後期に、英国の使節であったマッカートニーは、王の

* 本論文は、2008 年 12 月 13・14 日に行われた関西大学の第 1 回次世代国際学術フォーラム「境界面における文化の再生産」のセッション 1「近世東アジアにおける文化交渉としての外交」における報告原稿をもとに、日本語版公開のため最低限の修正を加えたものである。本論文の完成版は次年度刊行予定の英語版論文集に収録予定であり、本論文からの引用に当たっては極力英語完成版の方を参照していただければ幸いである。

¹ Jur van Goor, 'Merchants as diplomats: embassies as an illustration of European-Asian relations.' in: J. van Goor, *Prelude to colonialism. The Dutch in Asia*. Hilversum: Verloren, 2004) Blussé, 'Among feigned friends and declared enemies.' in: S. Gogner (Ed.), *Making Sense of Global History*. (Oslo: Universitetsforlaget) 154-168.

² Leonard Blussé, Willem Rammelink and Ivo Smits (red.) *Bewogen betrekkingen. 400 jaar Nederland-japan* (Hilversum: Teleac, 2000). 37. (日本語版: レオナルド・ブリュッセイ, ウィレム・レメリンク, イフォ・スミッツ編集(原著)『日蘭交流 400 年の歴史と展望』日蘭学会, 2000 年)。

使節として道徳的に受け入れ難く、そして恥ずべき行為として「叩頭」儀礼を拒んだ。このことは、伝統的な東インド諸国と近代的な西欧諸国の政治様式の典型的な衝突であり、または、両国間の文化的不理解の一例であると考えられてきた。歴史研究家のなかには、当時の英国とオランダとの外交を比較する際に、この事例を引き合いに出して、オランダ使節のファン・ブラームやティチングが、マッカートニーの1年後に北京に出向き、伝統的な儀礼に従って接見を行ったことは、オランダの外交やモラルが遅れたもので、英国と比べて近代化または啓蒙されていなかったことを証明するものだと主張する者もいる³。しかしながら、この単一の使節団についての歴史的説明だけに依拠して、18世紀後期のアジアにおける、オランダと英国の政治的およびイデオロギー的態度を判断することが可能なのであろうか。

アジアの様々な地域におけるオランダ東インド会社の外交使節団の報告書を見ると、オランダ人が地方の宮廷で伝統的な儀礼に従うことに戸惑いを隠せなかった様子も窺える。多くの場合、オランダの使節たちは、統治者に敬意を表すために這いつくばり、膝を使って歩みでるなど在地の様式での接見が求められた。従って、オランダの使節たちがこうした屈辱的な宮廷の儀礼に従うべきか否かという問題は、中国または東アジア諸国に限ったものではなく、また、18世紀後期にだけ確認されたものでもない。オランダ外交の意思決定は、西欧の政治的・知的な道徳観念によってではなく、現地の政治状況や経済的合理性を優先して行われたと考えられる。セイロンにおける実践と展開という構図の中に東アジアの外交使節を置くことは、当時のアジアにおけるオランダ外交の政治的態度を考察する上で、有用だと考えられる。18世紀後半のセイロンにおいて、キャンディ国王や他のヨーロッパ勢力に対するオランダの立場は急激な変化を経験した。本論文では、この時期のオランダとキャンディとの外交関係について、特に例年の使節団の派遣に伴う宮廷儀礼の役割について論じる⁴。

一 オランダ東インド会社とセイロン

セイロンと聞けば、すぐに紅茶が思い浮かぶ。しかし、オランダがセイロンに足を踏み入れた理由は、当時ヨーロッパにおいて高値で取引されていたシナモンが栽培されていたからであった。同じ理由で、ポルトガルは、16世紀にセイロンにおける地歩

³ Leonard Blussé, *Visible cities : Canton, Nagasaki, and Batavia and the coming of the Americans*. Harvard University Press, 2008, 83 – 88.

⁴ オランダ—キャンディ関係についてのこの分析は、主として筆者が2002年から2006年にかけて行った、スリランカにおけるオランダ・イギリスの植民政策についての博士論文研究に基づくものである。その成果は以下の出版物にまとめられている。*Dutch and British colonial intervention in Sri Lanka, 1780 – 1815: expansion and reform*. BRILL, Leiden 2007.

を固め、17世紀に入ってからその影響力を拡大させてきた。しかし、1658年、20年間の戦いの後、オランダはポルトガルに代わってセイロンにおける権益を確保することになった。オランダがシナモン交易独占のために採った戦略はシンプルなもので、シナモンの栽培を管理下におき、沿岸地域を監視することによって、シナモンが他者によって輸出されることを防ぐことであった。こうした戦略の結果、オランダは、ヨーロッパにおけるシナモン価格の決定権を獲得し、オランダ東インド会社にも巨万の富をもたらした。しかし同時に、セイロンは、その影響力の大きさ故に、オランダ東インド会社にとって複雑な交易拠点にもなっていた。

シナモンの生産管理と貿易統制は、セイロンの地域社会への広範囲に渡っての介入を必要とした。当初、シナモンの原材料は、島の南西部の森林地帯にある野生のシナモンの木からのみ手に入れることができた。オランダの代表は、シナモン省を統括し、チャリアと呼ばれるシナモン労働者を監督するのをその職務としていた。加えて、オランダ東インド会社が沿岸部に点在する拠点を維持し続けなければ、セイロンの貿易統制は実効性を保てなかった。北部のジャフナ、西のコロンボそして南のゴールの3つの主要な港は、より小規模な拠点及びそれらに直結する後背地を統括する責務を担っていた。コロンボには本部が置かれたが、徐々にバタヴィアの高等機関と本土の17人会に従属する組織となっていた。オランダ東インド会社は、当初シナモン交易を確保するためだけのためにセイロンにやって来たが、18世紀の間に沿岸地域の植民地支配を担う主体へと発展していった。加えて、拡大する管理の経費をまかなうために、オランダ東インド会社は、現地の課税制度から得られる歳入にますます依存するようになっていった。

オランダのセイロンにおける統治権は、島の内陸部山地に位置する最後の現地王権、キャンディ王国と競合するものであった。最初、キャンディ王国の王、ラージャシンハⅡ世は、ポルトガル勢力を一掃するために、オランダ勢力を歓迎した。しかし、オランダが、もともとポルトガルが占有していた権益の継承を主張するようになると、一転してオランダ勢力に対抗するようになった。そしてその後20年間、オランダとキャンディ王国は、戦い続けることになった。しかし、1688年以降、外交的手段によって両国の関係が修復されると、互いに使節団を交流するなど、両者の関係は新たな段階に入っていた。

ハーグにあるオランダ東インド会社の文書館に保存されている記録を見ると、当時のアジア地域におけるオランダ使節団の様子を窺い知ることができる。文書によると、時計やコンパスなどのヨーロッパの物珍しい贈り物と共に、馬や北インドの高価なシルクなども贈られていることが分かる。さらに、他のアジア諸国の宮廷と同様に、このキャンディ王国でも、オランダ使節団は、例えば、王に手紙を差し出す際には、銀の平皿に載せられた文書を頭の上に掲げ、深く頭を下げ跪き、儀礼に従って王に敬意

を示すことが求められた。こうした一連の儀礼的行為が、オランダのキャンディ王に対する服従を象徴的に確認するものであることは言うまでもない。しかし、両国間の平和を維持することを別にすれば、オランダにとってこれら使節団の主たる目的は、もし王がそれを禁ずれば供給不足になるであろう、王の森林に分け入ったのシナモンの採取許可を求めることにあった。使節たちは王を直接目にするのではなく、王は常に接見の間の奥に備えられた幕の後ろにいた。政治的な課題について、王と直接話を交わすことはなく、常に首相を経由して問答がなされた。山を登って王宮に至るまでの道程、オランダ使節団は大臣らと頻繁に接見し、実際にはそこで両国間の協議が行われた⁵。

二 1688年から1740年における微妙な均衡、儀礼の重要性

歴史家の Tikiri Abeysinghe は、1688年から1740年間のオランダ使節団の分析を行い、この時期に使節団による接見が、慣行化されていったことを明らかにしている。このことは、一方で、両国間関係におけるキャンディ王国の自意識の増大を示し、他方では、オランダの力の衰退を意味している。彼は、この時期にオランダが定期的に使節を派遣して王を表敬し、贈り物を届け続けるようになったため、王は彼らを臣下と理解していたとも論じている。さらにオランダは、新年の直前、臣下が貢物 (*dākuma*) を王に届ける4月の初頭に宮廷を訪れていた⁶。このように、儀礼を用いて従属的臣下としての外国人交易者の地位を確認させるというメカニズムは、中国または日本の宮廷でも確認することができる。

しかし、オランダとキャンディ王国との関係性は、それらの関係性より複雑であり、スリランカにおけるオランダの交渉上の立場は、他の東アジア諸国よりも強いものであった。歴史研究家の S. Arasaratnam は、キャンディ王国がオランダ勢力に対して政治的に優位であったにもかかわらず、オランダがキャンディ王国をその他の世界から孤立させることによって実質的には支配的な地位を維持していたと主張している⁷。オランダは、キャンディ王国の交易とその南インドとの往来を管理下におき、結果、キャンディ王国は、オランダに強く依存せざるを得なくなっていた。1750年代まで(の

⁵ この期間の、より詳細な外交手段に関しては:L.J. Wagenaar, "'Met Eer En Respect.' Diplomatieke Contacten Tussen De Voc-Gouverneur in Colombo En Het Hof Van Het Koninkrijk Kandy, 1703 - 1707," in *Hof En Handel. Aziatische Vorsten En De Voc 1620 - 1720*, ed. Elsbeth Locher-Scholten en Peter Rietbergen (Leiden: KITLV, 2004)。

⁶ Tikiri Abeysinghe, "Princes and Merchants: Relations between the Kings of Kandy and the Dutch East India Company in Sri Lanka (1688-1740)." *The Sri Lanka Archives* 2 (1984). 35 – 60。

⁷ Sinappah Arasaratnam, "The Kingdom of Kandy: Aspects of Its External Relations and Commerce.," in *Ceylon and the Dutch, 1600-1800*. (Aldershot: VARIORUM, 1996). 109 – 127。

セイロンの状況は次のようであった。), オランダは権力の正当性を維持するためにキャンディ王国に頼らざるを得ず, 故に形式的には王の臣下とみなされていた。しかし, 実質的には, キャンディ王国は, 南インドや東南アジア大陸部の仏教組織との往来や交易の全てにおいて, オランダ東インド会社に頼るところが大きかった。キャンディ王国がオランダ東インド会社に対して圧力をかけうる唯一の手段は, 彼らの領内におけるシナモンの採取権を与えないことであった。このことが, たとえ不快であっても, オランダ勢力に使節を派遣させ, 王より課された儀礼の様式に従い続けることを余儀なくさせていた。

三 戦争—1740年から1766年にかけての両勢力の自意識の変化

オランダとキャンディ王国の互いの利害関係を含む協調的な関係は, 約70年間続いた。しかし1740年代以降, 両勢力の関係は緊張し, キャンディ王国は, それぞれの港を返還することと, より主体的に南アジア諸国と交流することを求めるようになった。加えて, 仏教戒律の復興や新しい権力層の台頭が, 王国自治を見直す追い風となった。一方で, 3つの主要拠点であるジャフナ, ゴール, そしてコロomboの後背地への植民的介入を増大させるため, オランダも, 単なる臣下以上のより強大な地位を追い求め始めた。そしてついにオランダは, 毎年の使節派遣で行われていた恥ずべき儀礼に従うことを止めるべきであると感じるようになった。加えて, 毎年の使節派遣は非常に費用がかかり, できれば中止したいとも考えていた。当時の書簡や報告書には, キャンディ王が信用に足らないものであり, 権力も衰退してきているとのオランダ長官の記述が見受けられる⁸。

両国間の自意識の変化と共に, 互いの緊張関係も高まっていった。そして, 外交は両者の関係を定義する手段たり得なくなり, その代わりに戦争が始まった。戦争に至る過程について, 簡単にして明快に要約することは困難ではあるが, L. Dewaraja と D. A. Kotelawela は, 王国の内的な発展や新しい王朝の誕生, また仏教の復興が, キャンディ王国のオランダに対する態度を変容させたこと説明している。また, オランダが, 如何に内部紛争を利用しようと試み, 特定の宮廷官僚等と陰謀を企てたかということについても触れている⁹。緊張は1750年代を通じて高められ, ついには2つの事件を

⁸ より詳細な記述に関しては, ヤン・シェレーダーの自叙伝を参照のこと。

⁹ D.A. Kotelawele, "The Voc in Sri Lanka 1688 - 1766: Problems and Policies," in *University of Peradeniya History of Sri Lanka. Volume 2 (C1500 to C1800)*. ed. K.M. de Silva, *University of Ceylon (Peradeniya) History of Ceylon (Sri Lanka)*. (Dehiwala: Sridevi, 1995). 233 - 280. L.S. Dewaraja, "The Kandyan Kingdom and the Nayakkers, 1739 - 1796.," in *University of Peradeniya History of Sri Lanka. Volume 2 (C1500 to C1800)*. ed. K.M. de Silva, *University of Ceylon (Peradeniya) History of Ceylon (Sri Lanka)*. (Dehiwala: SRIDEVI, 1995). 281 - 320.

きっかけに両国は戦争状態になり、この状態が 1766 年の 2 月まで続いた。1 つ目の事件とは、ヤン・シェレーダーの定めた農業政策に対して、南西地域に位置するマターラでの反乱が起こり、それにキャンディ王国の支援があったことであった。2 つ目の事件とは、一部の僧侶や貴族らによって王を退陣させようとする陰謀が、オランダの支持を見込んで行われたことだった。

キャンディ王国は、複数のオランダ駐屯地の占拠に成功するものの、バタビア、オランダ本国およびインドからの支援が加わると、オランダは勢力を取り戻した。そして、ついにルッベルト・ヤン・ファン・エックは、キャンディ王国の首都に侵攻することを決意した。オランダは、1765 年の数ヶ月間、首都を占拠したものの、食糧不足と度重なるキャンディ軍によるゲリラ的挑発活動によって、首都を明け渡すことになった。そして半年後の 1766 年 2 月 14 日、両勢力は平和条約に署名することになった。この条約はオランダにとって有利なものであり、その内容は、首都を明け渡す代わりに、オランダの軍事支配の優位性を強調するものであった¹⁰。

四 1766 年から 1782 年の儀礼を省いた使節団

1766 年、キャンディ王国とオランダの間に新たな力の均衡が生まれ、それはただちに外交関係に反映された。1766 年以降、オランダは締結された条約に従うことを重んじた。さらに、毎年おこなわれていた宮廷での接見についても、従来オランダに強いられた屈辱的な儀礼は廃止されることとなった。使節団は双方に交流をするようになり、キャンディ王国の使節団は 1 月にコロomboを、オランダの使節団は 3 月または 4 月にキャンディ王国を訪問するようになった。オランダは、従来の従属的な関係から、キャンディ王国と対等の統治者としての地位を手に入れることに成功した。同時に、オランダが持っていたキャンディ王国の領地への経済的統制も、これまで以上に強固なものとなっていった¹¹。

戦争後の両勢力間の同意は、オランダにとって有利なもので、2 つの意味でキャンディ王国への優先権を認めるものであった。1 点目は、オランダは、バレーン山にまで及ぶ王の領地でのシナモンの収穫を、通年にわたって行う権利を手に入れた。以前

¹⁰ L.J. Wagenaar, "Knielen of Buigen? De Gezantschappen Van De Compagnie Naar Kandy Na Het Vredesverdrag Van 1766," in *Kapitaal Ondernemerschap En Beleid*, ed. Davids & Frisky (Amsterdam: NEHA, 1996), 441 – 466. A.F. Schrikker, "Een ongelijke strijd? De oorlog tussen de Verenigde Oost-Indische Compagnie en de koning van Kandy, 1760-1766." (An unequal battle? The war between the Dutch East India Company and the king of Kandy, 1760-1766.) In Gerrit Knaap en Ger Teitler, *De Verenigde Oost-Indische Compagnie tussen oorlog en diplomatie*. Leiden, 2002.

¹¹ Sinappah Arasaratnam, "Dutch Sovereignty in Ceylon: A Historical Survey of Its Problems," in *Ceylon and the Dutch, 1600 -1800*, ed. Sinappah Arasaratnam (Aldershot: VARIORUM, 1996), 105 – 121.

は、オランダは、毎年使節団を派遣し、接見の場で王の許可を得る必要があったが、使節団を派遣することの意味は戦争後、本質的に変化していった。何しろ、オランダは、西海岸のプッタラムの近郊、コロンボの北、および南東部のマターラ近郊の塩田を管理下に置いたため、キャンディ王国に対して、交渉上有利な立場にあった。そして、オランダはシナモンの収穫権と引き替えに、キャンディ王国にそれら沿岸地域での塩の採取を許可したのであった。2点目は、諸外国、特に他のヨーロッパ諸国からのキャンディ王国への接触を排除することであった。オランダは、さもなければキャンディ王国がオランダのシナモンの独占を侵食し、他のヨーロッパ諸国がセイロンへの影響力を拡大することを危惧していた。南インド勢力や、アラカンやシャムの仏教組織との交流は、東インド会社の管理下に置かれることになった。例えば、王室の親戚がマドゥライへ旅行をする場合や、王の花嫁たちが南インドで集められる際も、オランダ東インド会社の協力が要請されていた¹²。

条約は王国を外界から孤立した状態に留めておき、オランダへの依存体質を作り出すことを可能にした。王国を孤立させることは、オランダがかねてから望んでいたことであったが、条約締結後、オランダはキャンディ王国に対しより有利な地位を手に入れたため、より効果的にそのような政策が推し進められた。一方、王国は、条約の条項すべてに従うつもりはなかった。終戦後数年間、オランダの侵攻に対する恐怖から、キャンディ王国は条約に異議を唱えることはなかったが、結果として条約締結後16年にわたり、新たな国境の確定をめぐるのいざこざがあったにもかかわらず、両勢力の関係は比較的順調なものであった¹³。

オランダは、道義的な意味合いからというよりも、当時の力関係を反映させるために、好機を捕らえて使節派遣における儀礼を拒絶した。同時に、キャンディ王国は、オランダの競合相手であるフランスと英国に対する直接の関係を築くことにより、交渉における立場の向上を目指した。1770年代の後期には、キャンディ王国は、南インドの親戚を経由したフランスとの接触を試みている¹⁴。こうすることによって、南アジア地域におけるフランスと英国の影響力の拡大というオランダの弱みに付け込もうと

¹² NA VOC 3571 16/8 1780 ff 94, 96, 119-200: キャンディ王国の王女. VOC 3842 7/5 1790 カルナティカの太守との接触。キャンディ王国におけるオランダの役割についての詳細な分析は、L. Wagenaar を参照のこと。‘The arrival of Buddhist monks from Siam in 1753. Mid-eighteenth century religious contact between Kandy and Siam, as recorded by the Dutch East India Company’ in: Dhiravat na Pombejra, Han ten Brummelhuis, Nandana Chutiwongs, Pisit Charoenwongsa, *Proceedings of the International Symposium 'Crossroads of Thai and Dutch history'* Bangkok Seameo-Spafa 2007。

¹³ これは海岸線と国境線との間の、距離の計測に関する不一致によってもたらされた。キャンディ王国の計測が、オランダのものとは一致することはなかった。明らかにオランダは、キャンディ王国よりも広い範囲を計測していた。

¹⁴ Mudaliyar C. Rasanayagam, "Tamil Documents in the Government Archives.," *Historical manuscripts. commission, Ceylon*. 3 (1937). その点については、フランスはオランダと連携して、王からのその申し出を丁重に断った。18-22 ページには、スリランカ国立文書館の文書番号 K45, K24, K38, K43 and K 64 におけるタミル語の書簡が言及されている。

した。1782年、第4次英蘭戦争の間、トリンコマリーは英国によって占領された。英国の使節ヒュー・ボイドはキャンディ国王に熱烈に歓迎された¹⁵。英国はオランダ勢力を一掃するために条約の締結を望んでいたが、キャンディ王国は、今度は英国に、しかもオランダより強圧的に支配されることを恐れていた¹⁶。

五 儀礼の復活（1782年から1790年）

成果が限定的であったにもかかわらず、ボイドの使節行は、オランダを不安定な立場に置くこととなった。オランダは、キャンディ王国が英国と連合する好機を看過したことに感謝せねばならず、宮廷も、何からの見返りをオランダから期待していた。歴史研究家のワーヘナールは、侮辱的な行為として排除されていた伝統的儀礼が、オランダの反対にもかかわらず、1782年になって復活した経緯について述べている。この変化の背景には、ヒュー・ボイドが、儀礼を受け入れ、王との接見を行ったことがあった。つまり、オランダが儀礼を再び拒絶した場合、キャンディ王国が英国勢力と同盟を結ぶ可能性があったからである。キャンディ王国が、英国からの関心を引き寄せておくことは、セイロンにおける力関係について再交渉を行う上で、最適の政治手段であった。儀礼の復活はもちろん、そのことは結果的にキャンディ王国が西部沿岸地域の管理権を取り戻すための追い風にもつながった¹⁷。事実、1782年以降、交渉の主導権は再びキャンディ王国の手中におさまった。

1784年の春、恒例の接見の場で、オランダは沿岸諸港の管理権の問題のため、王国領内でのシナモンの収穫が許可されないことを知らされた。ファルク長官は、沿岸部の管理権を保持しているのは、ヨーロッパ諸国からの侵攻を食い止めるためであることを理由に、キャンディ王国の理解を得ることに努めた。ファルク長官はまた、両勢力が良好な関係である限り、シナモンの収穫の許可が得られないということは、全く受け入れられないと主張した¹⁸。翌年1月のコロンボでのキャンディ王国使節との接見の場で、ファルクは港の管理権の返還の決定権は持っておらず、それは上官の命令によってのみ決定されうる事項であることを強調した¹⁹。しかし、ファルクはその長官在任末期には、

¹⁵ Sinharaja Tammita-Delgoda, "The English East India Company and Sri Lanka 1760-1796," in *University of Peradeniya History of Sri Lanka. Volume 2 (C1500 to C1800)*. ed. K.M. de Silva, *University of Ceylon (Peradeniya) History of Ceylon (Sri Lanka)*. (Dehiwala: SRIDEVI, 1995). 531 – 552. V.L.B. Mendis, *The Advent of the British to Ceylon, 1762 - 1803*, 1st ed., vol. 18, *The Ceylon Historical Journal* (Dehiwala: Tisara Prakasakayo, 1971), 52 – 79.

¹⁶ 30 ページ下部を参照。

¹⁷ Wagenaar, "Knielen of Buigen?." 441 – 446.

¹⁸ NA VOC 3664 20/3 1784, ファルクから3,4地区長へ。

¹⁹ NA VOC 3665 .../1 1785, folio 1032 –1034 は、キャンディ王国使節団への対応を記録している。

もはや王室に対してははっきりとした態度を示すこともできなくなっていた²⁰。ボイズの事件は、キャンディ王国の交渉上の立場をより有利に導き、その結果キャンディ王国とオランダ勢力に新たな緊張関係がもたらされたことは明らかである。しかし、1785年2月6日に死去したファルク長官に、この問題を解決することはできなかった²¹。

ファルク長官の在任末期に高まった両国間の緊張関係が、ファン・デ・グラーフによって間もなく緩和されたことは、注目に値する。ファン・デ・グラーフは就任後、オランダ東インド会社のキャンディ王国からの早期自立を目指す方針を表明した。コロomboとガレ地域のシナモンの栽培周期を早めることにより、シナモンの需要を満たそうと考えた。それまでの間、キャンディ王国との交渉権を維持するために、塩の採取拒否を利用しようとした。加えて、密輸に関する厳しい罰則も設けられた²²。彼の事態収拾策は成功し、危機は沈静化されたことが、当時の報告書から伺い知ることができる。

1789年ごろまでの使節団の記録には、オランダ東インド会社は、キャンディ王国領内におけるシナモンを自由に収穫し、両国の関係は良好であったことが報告されている²³。しかし、沿岸地域をめぐる要望が毎年のように出されるにもかかわらず、それらについての議論は棚上げにされた。バタビアはこの状況を容認し、また、キャンディ王国がオランダ東インド会社に好感を抱いている限りは、それらの要求に対する17人会の消極的な回答も先送りにされるべきだとするファン・デ・グラーフの主張にも同調していた²⁴。こうした両国の協調的な関係の様子は、1786年のキャンディ王国への使節団の報告書の中にも見受けられる。オランダは、宮廷に楽団を送り、王は演奏や踊りを楽しんだことも報告されている。オランダの使節団も、象の曲芸などを鑑賞して楽しんだことを詳細に、また何度も強調して報告書に記したのであった²⁵。

六 外交の断絶

1789年以降、オランダ東インド会社と王国の関係は、新しい局面に入ってしまった。1790年まで、シナモンの栽培は順調であった。進取的な長官と評されるファン・デ・グラーフの統治の下、セイロンの沿岸地域への植民的介入はさらに強まっていった。

²⁰ ファルク長官は、王室の態度を軟化させるために、キャンディ王国が本土の17人会にヤコブ・ピーター・ファン・ブラームを経由して書簡を送ることを許可した。これはキャンディ王国への最終結論の通達を先延ばしし、さらに、決定に関わる責任を上官に委ねようとするファルクの意図でもあった。

²¹ NA VOC 3692, resolution in council (評議会決議録) 6/2 1785。

²² NA VOC 3692 resolution in council (評議会決議録) 10/2 1785。

²³ NA VOC 3841, 27/1 1790。

²⁴ V. Kanapathypillai, *Dutch rule in maritime Ceylon* 156 – 170。

²⁵ NA VOC 3720, キャンディ王国への使節団に関する報告 13/4 1787, ff. 107 – 109。

ファン・デ・グラーフは税収を増やすために農業に力を入れ、行政の効率化をおこなった。彼が長官の地位にある間に、植民地国家形成への動きが加速され、その施策は、1796年の英国勢力によっても継続された。こうした状況下において、常にオランダ統治への脅威となりうるキャンディ国王の失脚を狙う勢力への支援が、このオランダの長官によってなされようとしたと想像するのは不自然ではない。1780年代にかけて、王政は不安定になり、2つの派閥が互いに反目し合っていた。ファン・デ・グラーフは、その内の1つの派閥を懐柔し、王の排斥を図った。もちろんこのような陰謀は、それを快く思わない彼の上官たちに対しては伏せられていた。

1791年5月、シナモン労働者を保護する名目で、内地への侵攻が開始された。その地域の広大な土地を保有する領主の一人からはオランダ軍への支援が約束されていたため、侵攻当初は、苦戦を強いられることを予想してはいなかった。しかし、作戦は4日と続くことはなかった。隊を率いたデ・メロン大佐²⁶は、悪天候と期待していた支援が得られなかったことから、程なく引き返したのであった。結果的に、ファン・デ・グラーフの作戦は失敗に終わった²⁷。

その後ファン・デ・グラーフは、王室がポンディシェリのフランス勢力と連絡を取っており、その支援を求めていることを知った²⁸。これを口実として、ファン・デ・グラーフは次の作戦行動を計画したが、バタビアの上官によって阻止された。1792年の秋になるとキャンディ王国とオランダとの緊張関係はやや緩和された。両国の境界線は解放され、キャンディ王国の国民も沿岸地域に下りてきて交易できるようになった。ファン・デ・グラーフは、最初のキャンディ王国の使節団がコロンボへやって来るのを心待ちにしていた。ファン・デ・グラーフの側から使節団を派遣することは、彼には耐えがたいものであったからである。その後、両国の関係は再び冷え込むこととなる。この状況が1795年の中期まで続いたが、新しい長官のヨハン・ヘラード・ファン・アンヘルベークは、セイロンにおける英国勢力の台頭を目の当たりにして、キャンディ王国が英国側につくことを防ぐために、キャンディ王国との交渉を再開した。この外交アプローチはしかし、同年のイギリスによる、セイロンにおけるオランダの権益の接収を防ぐことはできなかった。1790年以降、オランダとキャンディ王国の間には、どのような外交的な会見の機会も生じることはなかったのである²⁹。

²⁶ デ・メロン大佐は、1788年セイロンに配備されたデ・メロン隊の隊長である。

²⁷ NA HR 532 ff 98/99. 大佐は、エクネリゴダの計画の実現可能性を判断することを命じられていた (f.43)。

²⁸ NA VOC 3975 18/3 1792, コロンボとポンディシェリの往復書簡, 8/1 1793 コロンボからバタビアへの事態の要約。書簡のいくつかはスリランカ国立文書館のタミル語書簡の中から発見されている。

Rasanayagam, "Tamil Documents." 23-28.

²⁹ SLNA 1/3350 キャンディ王国への書簡 1791-1795. 1793年から1795年に発見された書簡では、接見について多く触れられている。1795年9月、ファン・アンヘルベークは書簡の中で英国勢力への懸念を表している。NA Nederburgh 442, 退任長官ファン・デ・グラーフから後任ヨハン・ヘラード・ファン・アンヘルベークへの覚書, July 15th 1794, §260-261. NA VOC 3975 11/1 1793, コロンボからバタヴィアへ 644-645。

結論

18世紀、オランダ勢力とキャンディ王国との関係性は不安定で、時に緊張したものであった。使節団は、両国の関係性を維持し、その相対的な力関係を再確認するための手段であった。使節団の間で行われた外交的やり取りや政治交渉の中で、儀礼は重要な役割を果たしていた。当初、キャンディ王国は、オランダとの外交交渉において、優位な立場を維持していたが、18世紀を経る間に、儀礼自体が、しだいに外交交渉の一部となっていった。18世紀を通じて、両勢力の微妙な関係性は、1760年代の4年間の戦争により一度途切れたのみであった。この戦争の後、両勢力の間で条約が締結され、オランダにキャンディ国王への従属の表現を強いる儀礼を廃止するという規定により、オランダの地位は高まった。興味深いのは、一度は排除された儀礼が、1782年に英国とキャンディ王国との間の関係性が強化される恐れが出てくると、再び復活したことである。これはいかに両国の関係性が不安定なものであり、また、使節団（の派遣）が外交的な手段として重要視されていたのかを印象づける事実でもある。

英国とフランスのキャンディ王国への関心の高まりといった国際情勢と、オランダとキャンディ王国それぞれの自己認識が、オランダとキャンディ王国の関係性を決定する要因となった。1786年の報告書を読むと、一見両勢力の関係性は友好的であり、オランダは不満を表すことなく儀礼を遂行したことが書かれている。あるいはオランダとキャンディ王国との関係は共存の伝統的様式に復したと判断されるかもしれないが、これは必ずしも事実ではない。やはりオランダのセイロン島における立場は相当に変化していた。実際、シナモン栽培が利益を生み、ファン・デ・グラーフの植民的野望がより強くなる1790年、オランダの外交は放棄され、国王を排除しようとする陰謀が企てられた。政治情勢の不安定化は、このオランダの長官にキャンディの大臣と通じて王室の掌握を目論む機会を与えたのである。

18世紀のキャンディとオランダの関係についての以上の事例研究から、2つのことを学ぶことができる。1つは、アジア諸国に派遣されたオランダ使節団の残した報告書は、オランダのアジアにおける外交関係を分析する良質な素材を提供してくれているということである。しかし、それらは個別に研究されるべきではない。オランダが活動していたところの現地の文脈を理解すること、時の経過と共に両者の政治関係が如何に進展したのかを理解することは極めて重要である。オランダとアジア諸国との間で繰り広げられた外交的な実践と伝統の比較検討も同様に重要である。2つ目は、アジア諸勢力と接触した当時、ヨーロッパ勢力に屈辱的行為として認識されていた現地宮廷の儀礼を受け入れるか否かという問題は、アジア各地域におけるオランダの相

対的な力量と密接に関連していることを明らかにするということである。オランダは、ヨーロッパ的道徳観の優位性という立場からのみ儀礼の行使を拒んだのではなく、より実践的かつ現実的な思慮を持ち合わせていた。もし可能であれば、彼らはその儀礼が両国の不平等な関係を際立たせてきたことに気づいているという理由で、速やかにそれを放棄したであろう。